

音楽が持つ力 穏やかな暮らしに向けた取り組み

18CC06 後藤春海

I. はじめに

障害者支援施設は、障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に位置づけられ、昼間実施サービス（生活介護、自立訓練、就労移行支援および就労継続支援 B 型）の中から都道府県知事等から認可を受けたサービスを提供する施設である¹⁾。

実習で担当させていただいた A 様は音楽が好きで、居室に CD をたくさん持っていたりしゃる方だった。

II. 実習先種別・実習期間

障害者支援施設

2019 年 6 月 24 日～7 月 22 日（うち 23 日間）

III. 事例紹介

A 様 40 歳代 女性

1. 主な疾患 もやもや病、脳出血、言語障害、量上下肢機能障害
2. 移動 車いす 左手で自走 ゆっくり自走
3. 趣味 松任谷由美、夏川りみが好き、

IV. 介護の実際

1. 課題の発見と分析

聴力はあるが、発声が出来ない。また、話しかけに首を縦に振り意思表示し表情は、ポーッとしていると機能が低下。また話かけると満面の笑顔を見せる。

2. 介護上の課題

興味を持てることを行い、今出来ていることを維持する必要がある。

3. 介護目標

長期目標：今迄より笑顔が増えて生活が出来る

短期目標：生活の中で興味を楽しむことができる

→CD で好きな曲を聞き、鈴を左手に持ち横に振る

→いろいろな活動を行い、好きなことを見つける

V. 実施及び結果

好きな曲を聞き、鈴を振る（7/12、7/13、7/15）居室にあった CD から曲を選び、一緒に歌を歌う笑顔が出る。左手で鈴を持ち横に振る。希望で左手は鈴を握っている（ずっともっていたりしゃる）音楽を聞き鈴を振る。満面の笑顔が出る、左手で鈴を持ちリズムに合わ

せて振る→趣味を楽しむことができたのではないか

VI. 考察

音楽の効果については「音楽療法」という方法での検証がなされている。音楽療法は、障害を抱え施設で生活をしている方から地域で自立した生活を営む方までを対象に、幅広く取り入れられている²⁾。音楽は、心に反応するだけではなく、同時にからだ（身体）にも反応を起こさせます³⁾。人間にとって音楽は今も昔も生活の必需品と言って過言ではない（中略）余程音量の、大きい音楽を除いては、みな違和感を抱かずに生活をしているにちがいない。A様の居室には、沢山のCDがありかつて音楽を楽しまれていた様子である。しかし実習期間開始時音楽を聞いていなかった状況だった。音楽を聞くとりくみを開始してA様は満面の笑顔で大きな口を開けて口を開けて声をだそうとされていた。普段声を出さない方であつたが「あー」と声を出すことが出来音楽の効価ではないかと振りかえつた。日野原ら（2002）健康管理のための方法として、体感音響装置、カラオケ、ヘッドホンステレオなどが挙げられている。今回のA様への取り組みでは、カラオケ、ヘッドホンステレオ、楽器の演奏の効価があつたと振り返る効果としては心の内部に鬱積した感情を吐露、発散させ、こころの鎮静、発場、心身の疲労軽減などの効価を示す。とされ確認した。実習先では、A様の担当をさせて頂き音楽、歌唱の効価があつたと実践させて頂いたA様の生活の中で音楽、好きな曲を聞く取り組みを着目していきたい。また表情を出すこと、声を出すことは心のいやしにつながるのではないか。

VII. おわりに

利用者のニーズを知るためには本人からだけでなく職員、家族などさまざまな人から話しを聞く事は重要であること障害があっても好きなことを続け持っている感覚機能を生かしていけることを学んだ。介護過程の展開を行うに当たり信頼関係は重要であることも学んだ。受け持ち利用者の好きなことの情報収集を行い、介護過程の展開を行った結果、遠くにいるときでも目が合い笑い合うことができた。

参考・引用文献

- 1) 介護福祉士養成講座編集委員会（2019）「最新 介護福祉士養成講座 10 介護総合演習・介護実習」中央法規出版 p.181
- 2) 日野原重明監修（2002）「標準 音楽療法（下）」春秋社 p.156
- 3) 呉竹英一他（2011）「はじめての音楽療法ハンドブック〈改訂版〉」ドレミ楽譜出版社 p.10